

筑波大学日本文学会会報

第28号

2004年2月

記憶(石埜敬子)	1
最中とお茶、チョコレート、そして新茶 —石埜敬子先生を送る—(犬井善壽)	3
日本文学だより	5
研究室だより	6
新刊紹介	11
伊藤博先生追悼文	13
卒業生だより	15
日本文学会教官学生名簿	18

記 憶

石 埜 敬 子

記憶には思いがけない落とし穴がある。

「お茶にしない？」と声をかけて娘が階段を降りていったので、少し遅れて私も居間に降りると、テレビ画面一杯になつかしい顔が映っていた。ピクター・マチュア演ずるところのドグ・ホリデーである。「『荒野の決闘』ね」というと、一目でよく分かったわね、と娘に驚いた顔をされた。今を遡ること四十数年、思い返せば私が大学生だった頃は、フランスに始まったヌーベルバーグが文字通り映画界に新しい波を巻き起こし、映画や演劇が熱っぽく社会運動としての役割を問われている時代であった。あちらの舞台でブレヒトを上演すればこちらの劇団はアヌイやジロドゥーを取り上げるといった具合で見ものに事欠かなかったし、下宿にテレビもビデオも電話もない分、時間はたっぷりあったから、演劇も映画もかなりよく観たように思う。ピーター・ブルック監督の「雨のしのび逢い」などは三、四回は観ているから、あの退屈さと物憂さを持ってあましたようなジャンヌ・モローの表情は今もありありと思いが出ることができ。神田の古本屋で映画の原作になったマルグリット・デュラスの『モデラート・カンタービレ』の翻訳を見つけたときは嬉しかった。「いとしのクレメンタイン」の主題歌で有名なこの映画「荒野の決闘」は一九四六年制作だから、池袋にあった名画館の人生座あた

りで見ただろうか。ヘンリー・フォンダが演ずる保安官ワイアット・アープが、弟を殺したならず者クリントン一家に復讐すべく、飲んだくれの元医師ドグの力を借りて闘いに挑む。そこにドグを追って清純可憐なクレメンタインが現れ、西部劇メロドラマの常道通りワイアットは彼女に心惹かれてゆく。今思えば聊か気恥ずかしいが、青春期のニヒリズムの中にあつた私には主人公の単純な正義感
は面映く、結核を病み、挫折して、屈折した形でしか感情を表現できないドグの破滅的な生き方や、そんなドグに粗野な愛を寄せる酒場の女チワワの方に感情移入はしやすかつた。

なつかしさと多少の得意さから、「この後にクレメンタインとワイアットがフォークダンスをする場面がある」とか「銃で撃たれたチワワをドグが麻酔なしで手術する」などと、相手の迷惑も考えず解説(?)を始めたのはよいのだが、それで最後はどうなるのと聞かれて、はたと返事に行き詰まった。驚いたことに肝心の最後がまったく思い出せないのである。これはどういうことなのか。我ながら感心するほど克明に記憶していると思っていたのに、不思議とも不甲斐ないとも言いようがない。「シェーン」や「真昼の決闘」はよく憶えているのにと、おぼつかない思いでいたら、途中から話に加わつた夫が、遠ざかつてゆくクレメンタインをワイアットが物陰から見送るのだと自信ありげに言う。それも何か違うような気がしたが、確信がないのでそう言われればそうだったかと思うより他なかつた。しかし、映画の最後で私たちは大笑いすることになった。テレビ画面はまったく逆の映像を映し出している。ドグに死なれたクレメンタインは小学校の先生としてこの地に止まることを決意し、ワイアットは彼女への愛を胸に再訪を約して去る―遠ざかつてゆく男と見送る女の後ろ姿、遠くに大きなサボテンの影。なるほどそうか、考えてみればそもそも男が旅立つのでなければ西部劇にならないではないかと、冷静になればこれ以外の結末はありえないのだった。それにしても、度忘れとか思い違いというのではなく、記憶が完全に真つ白だったのは、あまりに典型的な未来など当時の私にはおおよそ興味がなかつたからなのだろうか。

川端康成の『掌の小説』の中に「紅梅」と題する一文がある。庭の古紅梅を見ながら炬燵に入った父親と母親が思い出話をするのを台所にいる娘が聞いている。ところが二人の話が合わない。父は母に言い募られて自信を失いかけるが、しばらくして母親が突然何かを思い出したらしく、あっさり自説を撤回したために、「父は肩のこりがおりましたよな声」になる。その後二人は睦まじく話を続け、「話の一致を感じて」満足そうだが、真相を知る娘はそれが事実とは違うことに気づいて複雑な思いでいる、といった内容である。今までは気の利いた短編ぐらいにしか思っていなかったが、こうなると何やら恐ろしい。

記憶は本人が思っているほど信用できるものではないらしい。今回は確認できたからよかつたものの、そうでなければ私はこの西部劇を別のコンテキストに作り変えていたかもしれない。時と場合によっては、記憶は外部の意図的な操作によって簡単に塗り替えられる恐れもあり得よう。世界が不穏な方向に流れつつある今、戦争を体験した者の責任としても、興味のあるなしに関わらず見るべきところはっきり見据えて記憶しておかねばなるまいと、このところ私は気を引き締めている。

筑波大学での研究生生活は楽しかった。ここでの七年はどんな形で私の記憶に残るのだろうか。一緒に過ごしてくださった方々に心からお礼申しあげます。ありがとうございました。

最中とお茶、チョコレート、そして新茶

——石埜敬子先生を送る——

犬 井 善 壽

石埜先生が筑波大学に赴任される前の年であったかと思う、先生の前任大学である茗荷谷の跡見大学の研究室へ伺った。初夏の暑い日であった。手土産というのも変だが、某菓子舗の最中をほんの少し持参した。平安の文学などの書物が書棚いっぱいには並んでいる先生の研究室で、昔ばなしがはじまった。

先生の母校であり、かくいう私の母校でもある東京教育大学は、大塚の通りを隔てて跡見大学の向かい側にあった。今はその一部が筑波大学の学校教育部になっている。昔今の話になるのはごく自然である。先生は私の三年上級生であられるのだが、恩師のこと、先生の学年の私にとっては先輩諸氏のことなど、おいしいお茶を頂きながら、話はずんだ。

その後しばらくして、御茶の水の喫茶店で、またお目にかかった。ご執筆中の、鈴木一雄先生ご監修の『源氏物語』の担当「東屋」のご苦心などを聞かせて下さった。その書を出す出版社へおいでになった帰途とかであった。先生は、別れ際に、小さな箱を下された。

帰宅して開けてみると、小粒のチョコレートが並んでいた。後日、娘たちが高級品だと言ってすっかり食べてしまつて残念とお伝えすると、先生は、あの笑顔でお笑いになった。

平成九年四月、先生を筑波大学にお迎えした。赴任なさつた直ぐあと、先生は、跡見大学で以前に教えた人から届いたとおっしゃつて、静岡の新茶を下さつた。良い色の、良い香の、おいしい新茶であつた。以後、毎年、初夏になると、ご講筵に列した方から届くというその新茶のお裾分けにあづかつている。さりげなく、はい、いつものお茶、と言いながら渡して下さるその新茶を、その後、私は心待ちするようになった。

最中を毎年さしあげればよかつた、と先生が筑波大学をご退官なさる今になって思う。尤も、あの端正なお姿からすると、最中もチョコレートも大好きな私と違つて、最中を一度に幾つも召しあがるとは思えないが。お茶と最中を肴に、先生から、平安の文学のお話を沢山お聞きすればよかつた、と後悔する。七年という短い年月であつたが、教えを頂く時間は十分に取れたのであるから。学生諸君はそのような後悔をすることもない程、多くの教えをうけたはずであるが。

人の命を伸ばすとかいう新茶を、石埜先生は、毎年召しあがっている。先生のあのお元気さは、先生のあの颯爽とした歩き方は、新茶が源の一つであるはずである。その新茶を召しあがって、いつまでもお元気でいていただきたい、と希う。そして、いつまでもそのお裾分けにあづかりたいものだ、とも思う。